

---

## 死をめぐる新型コロナウイルス感染症の影響

### — 葬送文化と死別・グリーフサポートの観点から —

---

宮澤安紀<sup>1</sup>・尾角光美<sup>2</sup>

新型コロナウイルスが我々の生活にもたらした影響の一つに、死をめぐる位相がある。先進諸国ではいまや「克服」されたかに見えた感染症による死は、死にゆく罹患者を隔離し、葬送儀礼の場を奪い、遺族を喪の共同体から切り離すなど、これまで考えられてきた「良い死」のあり方を大きく転覆させるものであった。本稿ではこうした死の領域における新型コロナの影響を、葬送文化と死別・グリーフサポートの観点から整理し、現時点での考察を加えた。

---

<sup>1</sup> みやざわあき：筑波大学大学院人文社会科学研究科一貫制博士課程哲学・思想専攻、(公財)国際宗教研究所研究員

<sup>2</sup> おかくてるみ：一般社団法人リヴオン代表、英国バース大学大学院社会政策学博士課程

## 1. はじめに

死は人類にとって避けられない普遍的な現象である。人類の歴史のはじめから、毎日のように死はどこかで起こり、我々は常にその死がもたらす影響に対し何らかの手立てを使って対応してきた。すなわち我々は、死に対処する様々なすべ—宗教的、文化的、衛生的、医療的、福祉政策的、商業的なものまで含めて—を長い時間をかけて歴史的に、そして集団的に構築してきたといえる。しかし、そうした既存の対処法が突如として困難に陥り、多くの人が戸惑いの中に突き落とされたのが今回の新型コロナウイルス感染症（Covid-19。以下、新型コロナと略す）が引き起こした異常事態である。この未曾有の感染症は、我々が死と向き合う仕方をどのように変容させたのだろうか。

そもそも新型コロナによる死は他の死とどう異なるのかを考えてみたい。歴史的にみれば、今回のような感染症による死は、かつての前近代社会では当たり前のことだった。公衆衛生の観念や医療技術が未発達であった時代には、伝染病は現代よりも蔓延しやすく、幾度も襲ってくる感染の波は老若男女を問わず多くの命を奪うものであった。特に乳幼児や子どもの死亡率は高く、死は日常生活のいたるところに顔を出す身近なものであった。ところが近代に入ると、人々の生活環境や食糧事情が改善されるなか、医療的な知識や技術も大きく向上し、多くの感染症はワクチン開発などにより「克服」されるようになった。それに伴い人々の平均寿命も飛躍的に上昇し、死は老齢期に偏在する現象とみなされるようになったのである〔ウォルター2020：10-14〕。国によって大きな差はあるものの、現在、世界の人口の死亡原因の多くは心臓疾患や脳梗塞など非感染性のものとなり<sup>1)</sup>、感染症による突然の死という事態は現代に生きる我々にとってほとんど身近なものではなくなったと言える。

社会学者のT・ウォルターは、2020年の5月にオンラインで掲載された論説において、上記のように感染症を「克服」したかに見える現代の西洋社会で考えられている「良い死」は、新型コロナによってもたらされる死とは全く異質なものであると指摘している<sup>2)</sup>。彼によれば、近

代以降の西洋社会では、ホスピス運動が発展したことに示されるように、患者の意思や主体性を重視し、その人が望むような余生を過ごし、死を迎えることを目指してきた。ここでは個人が自律性を持ち、その人なりの充実した人生の終わりを迎えることが理想とされたのである。しかし新型コロナの罹患者の場合、ある人は急激に病状が悪化し、自分の死について考えたり、準備をする間もなく亡くなってしまうことになる。重症患者は完全に病院や医療スタッフに依存しなくてはならないし、医学的知識のない家族も同様である。患者は感染拡大予防のため、専用病棟に隔離され、家族と話し合うこともできずに死を迎える。新型コロナによってもたらされるこのような死の迎え方は、現代西洋社会で考えられている、死に向き合うことで充実した人生を終えるという「良い死」の理想をほとんど実現困難にさせているのである<sup>3)</sup>。

ただし、ウォルターの描いた「良い死」の転覆は、現在起こっている事態のほんの一側面を照射したに過ぎない。なぜなら何が「良い死」であるのかは、その時代や社会、それぞれの宗教や文化によって大きく異なるからであり、近代以降の西洋社会における「自律的な死」というあり方はそのひとつでしかないからである。そして今回の新型コロナは、多様な死の文化を持つ様々な国や地域を文字通りグローバルに覆い尽くすことで、ほとんどすべての局面において、従来考えられてきた「良い死」の実現を困難にしていると考えられる。しかもそれは、新型コロナに感染することで引き起こされる死だけではなく、人との触れ合いを妨げる感染症という特性によって、これまで行われてきた死に対処する多くの方法に影響を与えているのである。

本稿は、そうした異常事態が引き起こした、あるいは現在も進行中の事態に対し、葬送文化の変容とグリーフサポートという二つの側面から、死をめぐる新型コロナによる影響を整理しようと努めたものである。ここでは宗教社会学的観点から葬送文化の変容を扱ってきた宮澤と、社会政策的観点から死別の影響についての研究を行っている尾角の視点から、2020年に新型コロナがもたらした死をめぐる様々な変容に関する状況を現時点において整理し、それぞれの観点から考察を加えて

いる<sup>4)</sup>。ただしどちらの執筆者も共通して、新型コロナによるパンデミックは世界規模で生じている事象であることから、日本の状況を相対化する必要性を認識しており、本稿は全体を通じて、グローバルな視点から状況を俯瞰しようとしたものである<sup>5)</sup>。

なお、これから本稿で参照する多くの記事や資料は、新型コロナによる感染者・死者数が日本を含め欧米でピークに達し、未曾有の混乱が見られた2020年3月から5月頃、いわゆる第一波が欧米を中心に襲った時期に書かれたものであり、この原稿を執筆中の2020年9月には、ロックダウン等の措置によっていったん落ち着いたかに見られた感染拡大が、再び増加する第二波の兆候がイギリス、フランス、スペインなどのヨーロッパ各国で見られるようになってきている<sup>6)</sup>。こうした刻々と変化する状況に対し、本稿はその一時点を切り取ったに過ぎず、今後も状況を注視していく必要があることは付言しておきたい。

## 2. 葬送文化の変容

儀礼論を構築してきた文化人類学においては、葬儀を始めとする死の儀礼とは、共同体の成員の死やその遺体をもたらず脅威に対し、死の事実を受容し、遺体の処理を行い、成員の死によって社会が受けた損害を回復させ、日常を維持するために必要な「通過儀礼」である。言い換えれば、葬送儀礼とは「死を物理的、文化的、社会的に変換する儀礼」であり、残された人々が死や死者を理解し受容可能なものとするための総合的な「死の変換システム」なのである〔山田2007〕。

しかしながら、人を媒介し感染を広げる新型コロナは、様々な局面からこうした葬送の機会を奪い、あるいは従来の葬送のあり方を立ち行かなくさせた。このような異常事態は、伝統や慣習の性急な変容を強いることになるほか、喪に服す機会を失った遺族に「あいまいな喪失」を残すことで大きな精神的負担をもたらすと考えられる。しかしその反面、新型コロナによって生み出された新たな追悼のあり方や悲嘆の共同性が見られるようになってきているなど、必ずしも「失われた」という文脈ばかり

りで語れるものではない。ここではこうした新型コロナによる葬送文化への影響について、(1) 葬送儀礼を行う機会の喪失・葬送の簡素化、(2) 伝統的・宗教的儀礼への影響、(3) テクノロジーの利用による新たな葬送儀礼と共同性の創出、という三点から整理した。

### (1) 葬送儀礼を行う機会の喪失・葬送の簡素化

感染拡大予防のため、多くの国の政府が葬儀を含む人の集まりに厳しい制限を設けたことは知られている。感染が拡大しはじめた3月より各地でロックダウンが開始されたヨーロッパ各国では、3月の終わりから4月中旬にかけ死亡者数のピークを迎え、外出禁止は5月から6月には順次緩和措置が取られたものの、その間多くの遺族は通常期待される望ましい葬儀を行うことができなかった。

例えばヨーロッパで感染拡大が始まった当初、その最前線にあったイタリアでは、3月のはじめにロックダウンが開始され、3月18日の時点で新型コロナにより亡くなった死者2,978人は全て葬儀を行わず火葬・埋葬された<sup>7)</sup>。ロックダウンの最中は葬儀、結婚式、ミサなどの全ての宗教的儀礼が禁止され、葬儀を司式した神父が罰金を課される事態にまで発展したという<sup>8)</sup>。また3月17日に厳格なロックダウンを実施したフランスでは、その期間、あらゆる集会は禁止された。葬儀は例外として認められたが、参列者の人数は20人に制限され、さらに厳しい外出制限のために実際に参列できる人びとはほとんど限られていた。また新型コロナに感染した人の遺体は、死亡後すぐに棺に密閉されなければならなかったため、遺族は最後に故人の顔を見ることすらできなかった<sup>9)</sup>。遺族には、愛する人の突然の死と、さらにその死を悼み、悲しみを共有するための葬儀の機会を奪われるという二重苦が背負わされることになったと言える。

ヨーロッパほどには厳しい外出・集会制限が課せられなかった国でも、葬儀に対する人々の意識の変化から葬儀の縮小化・簡素化が進んだ。例えば韓国では、2月に新天地イエス教会創立者の弟の葬儀に多くの信者が参列し大規模なクラスターを発生させたあと、死者の感染の有

無にかかわらずこれまでの弔問客数は90%程度も減少し、通常現金で渡される香典まで口座振り込みになったという<sup>10)</sup>。

日本でも新型コロナの影響による葬儀の簡素化は、様々な調査によって数値的にも顕著に確認できた。例えば終活関連サービスを展開する(株)鎌倉新書では、2020年3月10日から14日にかけて、全国の提携葬儀社を対象にオンラインでアンケート調査を実施している(有効回答数128)。その結果、新型コロナにより「参列者が減少した」と回答した葬儀社は47.7%、「変化はないが、今後減少すると思う」と回答した葬儀社は41.4%にのぼり、すでに減少しているか減少する可能性を感じている葬儀社がおよそ9割に達することがわかった<sup>11)</sup>。また大正大学地域構想研究所・BSR推進センターでは、緊急事態宣言中の5月7日から5月24日にかけて、オンラインでのウェブアンケートにて各寺院における新型コロナによる影響を調査している(有効回答数517)<sup>12)</sup>。そこでは「葬儀についてどのような変化がありますか」を複数回答で尋ねたところ、「会葬者の人数が減った」が88.6%、「一日葬など葬儀の簡素化」41.0%、「打ち合わせ時間の短縮」が12.2%と、約9割もの寺院が葬儀参列者の減少を感じていたことが明らかになった。また自由記述からは、「湯茶提供・会食がなくなった」、「火葬のみ(いわゆる炉前読経もなし)で葬儀を実施せず、忌明・納骨法要から行いたいという依頼があった」など、葬儀の一部を省略する傾向も見られている。

このように、葬儀の小規模化や簡素化は、感染予防の措置として多くの国で見られるものであったが、問題はこうした傾向が今後一般的になり、感染状況が落ち着いたのちも継続するかどうかという点にある。例えばヨーロッパの中でも最も多くの死者数を記録しているイギリス(6月26日時点での死亡者数4万5,677人、WHO)では、感染拡大に先立って進行していた葬儀の簡素化が加速された趣があり、その背景には厳しい外出・集会制限の措置が指摘できる。イギリスでは感染拡大が深刻になってきた2020年3月中旬よりソーシャル・ディスタンス政策を本格的に実施し、3月23日にはボリス・ジョンソン首相の演説で外出禁止令が宣言された。ここでは一緒に住んでいない公共の場における3

人以上の集会在禁止されたが、葬儀のみはその対象外となり葬儀のために集まることは許された<sup>13)</sup>。しかしだからこそ、葬儀を行うにあたっては非常に厳格な制限が課されることになり、自治体によって対応の仕方に差はあったものの、6月9日に緩和措置を含む新たなガイドラインが出されるまでは、葬儀への参列者は近親者のみ、人数も制限され、2メートル以上のソーシャル・ディスタンスが徹底された。

そうしたなかで注目されたのが直葬 (direct cremation) である。その理由の一つは、イングランド保健省が3月末に発表したガイドラインに基づき、ブラッドフォード、リーズ、カークリーズ、ヨークのように、自治体が火葬場での喪主・遺族を含めた参列を規制し、実質的な直葬を要請するなどしたことがある<sup>14)</sup>。イギリスで直葬という言葉が広まったのは、歌手のデヴィッド・ボウイが2016年に直葬されたことがきっかけとなったと言われており [SunLife 2017: 11]、火葬場での葬儀や遺族の立ち会いを一切行わず、後日、遺族の必要に応じてお別れ会や埋骨・散骨式などを自由に行う点に特徴がある [ウォルター2020: 92-94]。イギリスでは現在、直葬は実施される葬儀全体の約5%の割合しか占めていないというが、直葬専門の葬儀社の代表によれば、2月から3月にかけて直葬の要望は二倍に増加したという<sup>15)</sup>。こうした流れのなかで、感染拡大防止を名目として制度的に直葬が支持されるようになったとすれば、イギリスの葬送文化はどのような方向へ向かうのかが注目される。もちろん、こうした状況に対しては、パンデミックによって引き起こされた簡素化の流れを極端に悲観するのではなく、遺族への調査など実証的データを土台として議論をスタートさせることが重要になるだろう<sup>16)</sup>。

## (2) 伝統的・宗教的儀礼への影響

死の総合的な変換装置である葬送儀礼は、当然のことながら、生と死を理解するための世界観を提供してきた宗教と関わりが深い。近年では先進諸国を中心に葬儀の無宗教化や個人化が進んでいるとはいえ、葬儀は基本的にそれぞれの国や地域の宗教伝統に従い、営まれてきたといえ

る。宗教によっては、定められた手順に則って葬儀が実施されない場合、死者や遺族によくない運命をもたらすとされているが、現在の新型コロナウイルスはそうした儀礼を通常の手順で行うことを困難にしている。

例えばイスラームを例にとってみよう。イスラームにおける一般的な葬儀の手順では、臨終の際には周囲で見守る人々が神への祈りを唱え、遺体は親族の手によって湯灌されたのち、火葬ではなく必ず埋葬され、葬儀後三日間の服喪期間の間、モスク等でクルアーンの朗誦が行われ、遺族は弔問を受けるとされる [塩尻 2008]。しかし、このように宗教的に定められた一連の手順は、感染拡大の状況下ではほとんど不可能となったと言える。

例えばイスラーム国家として知られるイランは、中東でも感染者数の増加が著しい国の一つとされ、6月29日までに確認されている感染者数は22万5,205人、死亡者数は1万670人と発表されている<sup>17)</sup>。イランでの葬儀は通常であれば、モスクか自宅で行われ、50人以上の参列者が集まって死者を見送るというが、新型コロナウイルスの蔓延下で葬儀や埋葬への参列者は最低限に制限され、死者は孤独のうちに亡くなり、埋葬に際し遺族は祈りの章句を唱えることもできず、自宅隔離の状態での親戚による弔問も受けられないという<sup>18)</sup>。しかもこうした制限は新型コロナウイルスによる死者だけでなく、すべての死者にも適用されるようになっており、葬儀の機会を失った遺族の苦悩を拡大させている<sup>19)</sup>。またトルコでも、通常は布に包んで遺体を埋葬するところ、コロナ患者の場合は棺に納めて埋葬し、イマームによる共通祈禱も行うことができなくなったという<sup>20)</sup>。さらにインドネシアでは、政府が感染防止策として遺体をラップで包み棺に入れて埋葬することを指示するなか、棺を使う習慣のないムスリムが反発し、遺族が遺体を強奪する事件まで起きている<sup>21)</sup>。

一方、同じくイスラーム国家のパキスタンでは、パンジャブ州が感染した遺体に防護服なしに触れてはならないとするガイドラインを提示したため、シャリア委員会 (Tanzeem Ittehad-Ummat Pakistan's Shariah Board) は、コロナ患者の遺体の湯灌は必要なく、埋葬前の乾いた沐浴 (Tayammum) で良いとする宗教命令を出し、宗教的儀礼よりも医

学的知識を根拠にした感染防止に配慮した<sup>22)</sup>。逆に、遺体からの感染の危険性は低いとしたうえで、ムスリムにおける湯灌の重要性を認識し、ガイダンスを発表し適切な防護服と設備において湯灌を認めたイギリスムスリム協会のような例もある<sup>23)</sup>。儀礼を維持すると同時に人々を導く存在である宗教者にとって、宗教儀礼と感染防止をいかに両立させるかという問題は非常に難しい課題であると言える。

もちろん、イスラームだけでなく、新型コロナによる宗教儀礼への影響は広範囲に及んでいる。その各国の状況(4月時点)はNPRの「コロナウイルスは多くの宗教にとって死の儀礼を変化させている」という記事に詳しい。この記事によれば、例えばインドではロックダウンの影響で遺族が遺灰をガンジス川へ運ぶことができなかつたり、イスラエルではユダヤ教の伝統に基づいたシヴァと呼ばれる喪の期間中の弔問ができず、遺族が孤独に取り残されたりしたという<sup>24)</sup>。また行政が遺体からの感染を危惧する場合には、土葬を志向する宗教的マイノリティが抑圧される状況も散見された。例えば歴史的にムスリム・ヒンドゥー間の宗教対立が続いてきたインドでは、ムンバイ当局が3月に感染者の遺体は必ず火葬するよう告知したところ、ムスリムの政治家から強い反対にあり、数時間で撤回するという出来事があったという<sup>25)</sup>。これは宗教的な影響力の強い諸外国だけの問題ではなく、別の記事によれば在日ムスリムの間でも、故人や遺族の意思に反して火葬されてしまうことに強い危機感を抱いている人々がいることがわかる<sup>26)</sup>。教義や伝統に基づいた儀礼を適切に行えないことは、宗教的共同体による遺族への支援が失われるばかりか、喪の悲しみと同時に宗教的な苦しみまでも抱えこまなければいけなくなることを意味するのである<sup>27)</sup>。

なお、2020年9月現在ではWHOにより「感染防止のために火葬が推奨される」という議論は「証拠に欠ける」として、当事者たちの文化的・宗教的背景を尊重した葬送が実施されるようガイドラインが出されている<sup>28)</sup>。また、これを参照して作成された日本の厚生労働省によるガイドライン(2020年7月29日付)でも、都道府県知事の認可のうえ土葬が容認されることを明記しており<sup>29)</sup>、正しい感染症予防知識に基づいたう

えて、当事者たちの宗教的・文化的需要に応えることが重要であるという理解が示されつつある。

### (3) テクノロジーの利用による新たな葬送儀礼と共同性の創出

葬送の変容という点に関し、最後に指摘しておきたいのが、新型コロナウイルスの流行により死の現場におけるテクノロジーの利用が急速に普及した点である。新型コロナウイルスが我々に与えた最も甚大な影響は、人々が集まり、直接的に時間や空間を共有することが困難になった点にある。これは葬送という場面においても多大な影響を与えている。なぜならすでに述べたように、葬儀という場が、遺された人々が死を理解し死者を受け容れ可能なものとするための総合的な「死の変換システム」であるとするれば、その場に立ち会えない、あるいは死の悲しみを他者と共有できる時間を持っていないという状況は、人々の死の受容をかなりの程度、困難にさせると考えられるからである。一方で、テクノロジーの発展が死を取り巻く環境や実践にいかに関与し影響を与えるのかについては、新型コロナウイルスの流行以前から、死に関する研究領域において関心が高まっていたトピックである<sup>30)</sup>。こうした新たなテクノロジーを対象にした研究が常に直面するのは、このような最新技術の人々が受け入れられるかどうかという点であるが、既存の葬送における実践をほとんど不可能にした今回のパンデミックは、人々のテクノロジーに対する理解と受容を大きく促進させたように見える。

感染拡大の状況下で当初、対症療法的に普及したのが、葬儀のストリーム配信やオンライン上での追悼式である。こうした技術は、多くの場合、新型コロナウイルスの拡大以前から存在していたものの、感染拡大防止のため集会の人数制限や外出禁止措置が取られたアメリカ、イギリス、オーストラリアや日本などで改めてその存在が目され、利用が進んでいる<sup>31)</sup>。例えば日本の葬儀業界では、これまでも僧侶の派遣サービスや葬儀料・お布施の明記などの動きに対しては批判的見解も含めて保守的な傾向が見られ、オンライン葬儀という試みにもニーズは少なかったという<sup>32)</sup>。しかし感染拡大の初期には葬儀における集団感染も報道された

ことから、遺族側からのオンライン葬儀の要望が高まり、葬儀社だけでなく個々の寺院においても通夜や葬儀のライブ配信が実施されるようになった<sup>33)</sup>。

アメリカでは疾病予防管理センター（CDC）が3月から5月にわたり50人以上の集会を取りやめるか延期するよう呼びかけたこともあり、葬儀のライブ配信が奨励された<sup>34)</sup>。なかにはテキサス州のある葬儀社のように、葬儀のライブ配信だけでなく、「ドライブイン葬儀場（drive-in funeral theater）」のサービスを開始したところもある。これは屋外のスクリーンに葬儀の様子を映し、車に乗った参列者がスクリーンの前に集うことで、人数制限やソーシャル・ディスタンスを気にすることなく故人を追悼できるというものである<sup>35)</sup>。イギリスでは、近年建てられた火葬場には海外に住む喪主のために葬儀の中継を行える設備が整っている場合が多いことから、3月には政府からFacebookなどのSNSを通じて葬儀のライブ配信を行うことが提案され<sup>36)</sup>、バース市の公営火葬場のようにハイビジョンのストリーミングシステムの導入を決定した自治体もある<sup>37)</sup>。さらにKeeper (<https://www.mykeeper.com/>) というオンラインのメモリアルサービスを立ち上げたカナダの女性が、4月に新型コロナで亡くなった自身の祖母のオンライン追悼式から得た経験を元に、そのやり方を順を追って具体的に紹介する記事を配信するなど<sup>38)</sup>、オンライン上での葬儀・追悼式への参列は徐々に人々の生活に浸透しつつあると言える。

もちろん、葬儀のライブ配信では、故人との直接的な触れ合いや、キス・ハグを含めた周囲の人々との身体的コミュニケーションが制限されるため、オンラインでの葬儀参列はより孤独でネガティブな代替案として見なされる場合もある<sup>39)</sup>。しかしその一方で、たとえこれまでとは異なる方法ではあっても、故人を見送る場が遺族にとって気持ちに区切りを付けるために重要な機会を提供しうることもある。このことは日本の事例からも見てとることができる。例えば北九州市にある寺院の僧侶は、自身が実施した通夜のライブ配信についてSNSで発信したところ、「コロナのせいで親戚の葬式を諦めた。心の整理がつかない」「妊娠後期

で産婦人科から許可が出ず、葬儀にも四十九日にも出られなかった。今回に限らず、常にライブ配信かテレビ電話をOKにしてほしい」などのコメントが寄せられたという<sup>40)</sup>。このことは、(1)で示した葬送の簡素化という流れに対し、人々が本来的に持つ、死者との別れや追悼の場の需要の強さを示していると言える。

ただし、こうした新たな技術を積極的に活用した葬送儀礼の実施は、(2)でも示したように、宗教的儀礼やそれを裏付ける教義を根本的に変容させる可能性も秘めている。例えばユダヤ教の伝統では、喪の期間であるシヴァの中心となる儀礼や祈りが成人男性10人の立ち会いのもとに行われなければ無効になるとされており、この立ち会いをZoomによるオンラインでの参加で代替可能なのかどうか、ユダヤ教の聖典トーラーにある文言の解釈をめぐる議論されているという<sup>41)</sup>。しかしこのような変化は、決してネガティブな側面のみで語られるものではない。例えば先ほどのZoomによるシヴァや葬儀の実施は、アメリカに住むあるラビにとっては、通常の場合では難しかった、国中に住んでいる人々が一堂に会することができる機会として、また家を出ることができなかったり、高齢である人々もほかのメンバーと平等にアクセスを得られるものとして、肯定的に評価されるものでもある<sup>42)</sup>。またイスラームの伝統では通常、女性は埋葬の場に同席できないと定められているが、Zoomによるストリーム配信で、初めて埋葬に立ち会うことができたと言っている女性もいる<sup>43)</sup>。様々な宗教伝統において、女性は葬儀の場においては周辺的な存在であったが、新型コロナによる儀礼の強制的な変更とテクノロジーの利用により、こうした宗教儀礼の根本的な変革が進んでいく可能性もある。

さらに新しい葬儀や追悼のあり方としては、完全なバーチャル空間であるオンラインゲームにおける実践の広まりにも言及しておきたい。例えばスクエア・エニックスが提供する人気RPGシリーズの「ファイナル・ファンタジーXIV」では、オンライン参加型のシステムを採用しゲーム内でプレイヤー同士による緊密なコミュニティが形成されていたが、あるプレイヤーのひとりが新型コロナで亡くなった際、プレイヤー

同士がゲームワールド内で大規模な葬列を実施し、故人を弔ったという。彼らは実際に故人に会ったことはなく、おそらく参加したプレイヤー同士でも面識はなかったと思われるが、彼らは黒い服を着用したアバターや黒い傘を使用することで、仮想現実上に喪の共同体を視覚的に作り上げた<sup>44)</sup>。また任天堂が提供するコミュニケーションゲーム「あつまれどうぶつの森」では、ゲームシステムの自由度の高さが活かされ、様々なアイテムを駆使して葬儀の場や、墓石を用いて故人を追悼する場がゲーム内に作りあげられた<sup>45)</sup>。もちろん、こうした行為の動機は様々で、ゲーム内のキャラクターとの別れを「葬儀」として演出するなど、実際の死別とは関係のない事例もある。しかしなかには、パンデミックの最中に親族を亡くし現実の葬儀に参列できなかったプレイヤーが、自身のゲームワールドに墓石を建て、故人を偲んで墓参や追悼を行っている例もあるという<sup>46)</sup>。こうした実践も、もちろん新型コロナの感染拡大が生じる以前から見られる現象であったと言えるが[Gibson 2017]、世界規模のパンデミックによって現実世界でのコミュニケーションが減少し、一方でゲームシステム自体の技術向上によって仮想空間がよりリアルに感じられるようになっている現在、今後こうしたオンライン空間でのバーチャルな葬送儀礼や悲嘆の共同性がどのように構築されていくのかも、重要な論点のひとつになるだろう。

最後に、これとは異なる位相であるが、SNSを活用した新たな共同体の形成とも見られる現象がイギリスで起こったことを記しておきたい。イギリスでは、政府や国教会によって葬儀への参列者が極端に制限された3月から5月の時期に、葬儀社を中心に古い伝統を復活させようと呼びかける動きが見られた。臨終にも、そして葬儀から埋葬までも一緒にいることができなかった故人とその家族のために、街中で霊柩車を見かけたら、昔の習慣にあったように足を止め、帽子をとり、頭を下げて弔意を示してくれないかという呼びかけだった。これはロックダウンのなかで孤立した遺族に、故人への敬意やひとりではないというメッセージを届けるためのもので、SNS上で何千もの人々がシェアを行なった<sup>47)</sup>。「古い伝統」と呼ばれているように、この慣習は、誰かの死がコ

コミュニティ全体のものとして受容されたひと昔前までは当たり前のことだったが、人口が流動化し、葬儀も個々の家族によって営まれるようになると、こうしたコミュニティ全体で死者を見送るという発想も消滅していったと言える。しかしこのパンデミックの状況のなかで、死者の見送りを家族という枠内に閉じ込めるのではなく、SNSという新しいデジタルサービスを利用して、それぞれの抱く死者への想いやグリーフをより多くの人々と共有しようとする点は、現在の「個人化された悲嘆」という問題に新たな光を投げかける出来事であったと考えられる〔鷹田2020〕。この視点は、続く論考において具体的事例とともに取り上げていきたい。

### 3. コロナ禍における死別とグリーフサポート

ここからは、新型コロナ禍における死別とその影響、グリーフサポートを概観し、現在の日本で求められる対策やさらなる考察と検証のポイントを示すことにする。グリーフはシュトレーベらによる定義では死別、喪失による自然な反応のことをさすが〔シュトレーベほか編2014〕日本においては、死別を経験した遺族への支援を表す言葉として「グリーフケア」「グリーフサポート」といった表現が使用されている〔坂口2010〕。本論考においては、「心のケア」を想起させる「グリーフケア」よりも、情報提供なども含めた広い支援を包含するイメージにあたる「グリーフサポート」という言葉を使用する。日本において新型コロナ以前の状況として、死別への支援であるグリーフサポートは、アメリカやイギリスよりも、国の政策や民間の支援としては不十分であったように考えられる。例えば子どもへのグリーフサポートはイギリスには150を超える団体が存在するが、日本では50にも満たない程度であり、遺族支援の情報提供なども自殺対策においては各自治体が作成しているものもあるが情報量の差も大きい。病院において、死亡診断書と一緒にグリーフサポートの情報が手渡されることが日常的な英米に比べると、日本の医療現場では遺族への支援まで意識をしている医師は少ない。こう

した背景がある中で、新型コロナによって増え続けている死に対し、それを経験した遺族にはどのような影響が起きているのか。また、現段階で提供されているグリーフサポートや、新型コロナの影響を受けて、グリーフサポートの現状がいかに変化を強いられているのか。ここではまず、(1) 死のもたらす影響が及ぶ範囲を捉え、次に(2) 新型コロナ特有の死の影響としての「あいまいな喪失」や、(3) 死の見えにくさについて触れる。そして(4) 「公認されない悲嘆」について概観し、(5) (6) (7) で日英におけるグリーフサポートの現況を論じる。なお、こうした状況を捉える際、社会政策的な研究の視座において重要な、個々人のレベル（マイクロ）、NPOなどの民間団体や病院（メゾ）、国、文化や宗教（マクロ）など多層的に意識しながら考察を加えることにする。

### (1) 新型コロナによる死の影響の範囲

新型コロナによる死の影響はどこまで及んでいるか。日本では、そもそも亡くなったことの影響がどの規模に及ぶかについて、データが示されているものが少ない。一つだけ例に挙げられるものとしては、自殺による影響の大きさについてである。厚生労働省が2018年に発行した相談者向けの指針<sup>48)</sup>においては「1人の自殺が、少なくとも周囲の5人から10人の人たちに深刻な影響を与えと言われており、家族と地域に与える心理的、社会的、経済的影響は計り知れない」と述べられている。2006年の自殺対策基本法制定により、国を挙げての自殺対策の一環で自死遺族支援に関する研究が十分に行われた結果によるものと思われる。

その一方で、新型コロナによる死の影響が及ぶ範囲について日本では未だに明らかにされていないが、コロナの死者数が19万人を越すアメリカにおいては、複雑な人口データと新型コロナに関するデータを掛け合わせて、1人の死が9人の近親者に影響を及ぼすことを明らかにしている [Verdery 2020]。もちろん家族構成は国によって異なるので、あくまでこの数字は参考程度かもしれないが、新型コロナの患者は孤独に亡くなっていくというイメージがあるのに対して、その死が周囲へ与え

る影響は想定以上に甚大だということは日本においても意識しなければならないだろう。

## (2) 不確かな死による「あいまいな喪失」

病院に入院している新型コロナの罹患者が家族に会えない例が起きている。死に直面するなかで、会えない家族とのコミュニケーションをどうしたらとることができるのかが模索されている。欧州でも先駆けて死亡者数が増加したイタリアでは、タブレットやスマートフォンでのビデオ通話が医療者によって導入され、それを参考にした他国でも活用されるようになった<sup>49)</sup>。日本では新型コロナの死について病院現場での実践が見えづらいため、そうした最期のコミュニケーションをしているかどうかについては情報が得られない。今後、コロナで死別を経験した遺族への調査や、病院への調査などを通じ、検証されることが望ましい。

日本では病院で最期をみとれないのみならず、火葬にも立ち会えず、遺骨になって戻ってきたという体験を伝えている遺族もいる。そのような遺族たちは遺体に直面することもなく、別れやお見送りをきちんとできなかったことにより「あいまいな喪失」[Boss 2009]を経験することになる。「あいまいな喪失」とは、存在と存在していないことが不確かな状況で生じる喪失体験のことであり、グリーフを複雑化するとされている。すなわち、新型コロナで家族を亡くすことにより、死の瞬間に立ち会えず、遺体がみられないために、「あいまいな喪失」に直面し、グリーフが複雑化する可能性がある。海外では、病院の外にガラス張りのケースを用意し、そこに遺体を安置するという事例があり、日本でも、例えば神戸市立病院<sup>50)</sup>では、感染者の遺体を納める袋を故人の顔が見えるように透明なものにするという取り組みが見られた。せめてもの「対面」を実現させることは、「あいまいな喪失」を回避し、死の実感をもつことを助ける重要なグリーフサポートである。一病院の一事例に留まるのではなく、医療政策のレベルで国や厚生労働省から推進していく必要があるだろう。

### (3) 死者が見える国と、見えにくい日本

日本においては、新型コロナによる死の見えにくさは、個人のレベルのみで起きているのではなく、社会レベルでも生じている現象である。海外と比較することで、その見えにくさを相対化することができる。CNNの報道<sup>51)</sup>によると、2020年4月の時点で、シカゴ・トリビューンなどの複数の新聞社で死亡欄の拡大をする動きが起きている。新聞社の担当デスクは全米規模で拡大され、新型コロナによる喪失の全容を捉えるべく努めている。短いながらも故人の人生の物語や特徴などを紹介することによって、数字に表す新型コロナの死亡統計を越えて、人間の物語としてより深みをもって伝えられている。シカゴ・トリビューンのグトウスキ氏は、普段は児童福祉や犯罪、ソーシャル・ジャスティス関連の担当だが、現在は死亡記事欄の主任記者を務めている。死亡記事欄の目的を以下の3つ、すなわち「犠牲者に敬意を表すること、遺族の慰めとなること、この健康危機によっていかに人々が犠牲になっているのかを十分に理解できるよう一般の人々の助けとなること」と掲げている。その後、アメリカの国内各紙が拡大して同様の特集を組んだ。またPBS<sup>52)</sup>のThe News Hourというニュース番組では、3月から9月現在まで6ヵ月間にわたって、新型コロナにより亡くなった犠牲者への敬意を示して故人の人生を紹介するために、追悼のコーナーが毎回設けられている。生前の写真を数多く使い、故人の家族や友人に丁寧に話を聞いた内容を元に故人の人生が紹介されている。

一方、日本では身内が新型コロナに罹患したと判明すると、差別や偏見の目で見られることを恐れ、亡くなったあと親族にさえ言えない状況に陥る人もいる。NHKのある番組<sup>53)</sup>で紹介された遺族のなかには、メディアなどで報道される医療従事者やその家族への差別を見聞きしたことにより、「亡くなった本人や私たちだったら、もっと（差別）されちゃうんだろうな。じゃあ、言えないなっていう。やっぱり後ろめたい病気なんでしょうね、何かすごく、かかっちゃいけない病気にかかっちゃったっていうのかな。世間的にコロナの病気が罪悪感たっぷりの病気だから言えないかな」と語る人もいた。芸能人の死であれば、志村けんさん

のように、追悼番組が行われ、生前の素晴らしかった姿が映し出されたりはするが、一般の人は、差別を恐れて、親族とともに悼むことさえできない現実がある。遺族にとって、亡き人を尊重できる社会と、亡き人も遺族も差別されるかもしれない社会というのでは大きな違いがあるだろう。死者が見えにくい社会では、遺族も見えにくい。アメリカのように、新型コロナによる喪失、死別の影響の規模を可視化することと、一人ひとりの死者の尊厳を大事にしようとする姿勢には学ぶ点があるのではないか。

#### (4) 「公認されない悲嘆」

前述したように、偏見にさらされる新型コロナによる死別というのは「公認されない悲嘆」[Doka 2009]を引き起こしている。K・J・ドゥカの提唱した「公認されない悲嘆」というのは、喪失を経験した人が公に認められなかったり、公的に悲しむことができない状況や、社会的に支援が受けがたい状況にあることを指す。たとえば、自殺やHIV、LGBTなどに関わる死などが該当し、その死別を経験した人は、周囲に悲しみや困難を表すことができず、孤独に苦しんでいることが多い。新型コロナによる死別の場合、濃厚接触者として遺族自身も隔離されることが多く孤立しがちであるが、さらに社会の偏見により、助けを求めづらくなっている状況があるのではないだろうか。遺族の現状があまり認識されていない現段階では判断することができないが、将来、当事者の抱えた課題や、その背景にある、社会が作り出している偏見と「公認されない悲嘆」の関係捉える研究が期待されるだろう。

#### (5) 国や行政による情報提供

それでは、上記のような状況に対し、国や行政レベルではどのようなグリーフサポートが行われているのかを、特に重要とされる情報提供の観点から見ていきたい。イギリス政府は、ウェブサイト上に、明確に「死別を経験された方への支援」(Support for the bereaved)というタイトルで情報提供の支援、ガイドラインの提示を行っている。提供されて

いる情報は、死亡登録の方法、グリーフケアやサポートを行っている団体の情報などである。イギリスにおいて細やかな支援が存在することがわかるのは、例えば経済的支援について、18歳未満の子どもや24週目以降の死産について、葬祭費、棺などの支援があることが記載されており、グリーフサポート団体としてLGBT専用の団体も紹介されている点から示される。郵便番号で検索すれば近隣の団体を見つけることのできる、検索サービスのページもある。また、こうした情報、ガイドラインは、PDFでパンフレットの形にまとめられているのだが、エスニックマイノリティにも配慮され、多言語<sup>54)</sup>に対応している。一方で日本においては、厚生労働省、内閣府のウェブサイト上を検索しても、上記に挙げたものと同様の情報提供は行われていない。厚生労働省の新型コロナについてのウェブサイトには遺族や葬送に関する項目はなく、対象者ごとにQ&Aが書かれているページには、一般市民、医療・福祉従事者、企業（労務）、労働者、動物を飼育する方、在宅介護家庭の方向けや、学校再開についての情報はあがるが、ここでも特に遺族向けや葬祭業者向けのものはない。その中から、一般市民向けのQ&Aを一覧しても、イギリスのウェブサイトにあったような、葬儀やグリーフサポートについての情報はほとんど確認することができない。

政府だけでなく、ロンドンのウェブサイトにおいては、「新型コロナに関する最新情報とガイダンス」<sup>55)</sup>というページの目立つ位置に「グリーフに折り合いをつける」(Coping with grief)という項目がある。そのページにはまず新型コロナの影響下で死別を経験した人への共感的なメッセージがあり、「とても悲しいことだが、もしかすると、亡くなる前に愛する人にお別れを伝える機会をもつことができなかつたかもしれない。それはとりわけ動揺することである」という文章からはじまっている。その言葉に続いて、死亡登録の方法、葬儀への影響や基準の提示、葬儀費用のサポート、各グリーフサポート団体、宗教的なサポート団体へのリンクが掲載されている。2020年4月に発行されている「葬儀に関する基準」<sup>56)</sup>にはソーシャル・ディスタンスは守りつつも、可能な限り通常に近い葬儀を行うことが推奨されていて「ソーシャルメディ

アを通じたライブ配信」の提供や、インターネット回線がない場合は、ビデオ録画をすることなども勧められている。そして、基準に挙げられている9項目のうちのひとつに「グリーフサポートが提供されるべきである」ということも明記されている。

国や行政レベルでグリーフサポートの必要性を認識しているかどうかは、国によって違いがあるだろう。日本では、交通事故、犯罪被害、自殺など、法整備がなされているものに関しては遺族への支援の必要性が認識され、支援も拡充されてきたが、そもそも死別一般にサポートが重要であるという概念は薄く、新型コロナという未曾有の事態に対しても、遺族にまでは目が届いていないように見受けられる。

## (6) イギリスのチャリティ (NPO)

国や自治体の次に、民間としてのグリーフサポートの現状はどのようなものになっているか、まずはイギリスのチャリティ (NPO) から確認したい。規模の大きなチャリティのウェブサイトには、新型コロナ下におけるグリーフサポートの情報が多数掲載されている。注目すべき点は、新型コロナによって死別を経験した人たちを対象としたものと、それ以外の死因によって死別を経験した人たちを対象としたもの、それぞれに新型コロナ下において必要とする情報や支援を提供していることである。

例えばイギリス最大のグリーフサポート組織 **Cruse Bereavement Care**<sup>57)</sup> (以下、クルーズ) のウェブサイトには、18ヵ月の闘病の末、ロックダウン中に母親を亡くした遺族の声が掲載されている。その遺族は、ロックダウンの影響で母親に会うことも叶わず、医療従事者など地域に必要な不可欠な公共サービスの従事者 (キーマーカー) であったため、友人や家族たちにも会うことができている辛い状況にあった。その事例の紹介に連なって、クルーズとしてはどのようにセルフケアをするのか、また、どのように他者を支えるのかが書かれている。その他、葬儀や追悼の場に関する助言や、医療従事者など最前線の現場で働く人たちへのセルフケアの情報、子どもや若者向けの情報、また、罪悪感や、怒

り、非難といった感情をどう扱うのか、さらに自分のグリーフの優先順位が高くないと感じている人に向けたメッセージ、有名人の死によるグリーフの影響など多岐に渡って、どのように対処すればよいのかという情報が掲載されている。

また、子どもや若者の支援をしている団体 **Winston's Wish**<sup>58)</sup> では、とりわけ若年層や子どもたちの周囲にいる大人を対象とした情報提供を行っている。「対面できない状況下で、学校の先生たちがどうやって死別を経験した生徒たちをサポートできるのか」「死別を経験した子どもたちや、家族に病人がいるとき、新型コロナについて子どもたちにどのように話したらいいのか」「子どもに新型コロナで亡くなったことをどう伝えるか」「子どもたちが学校にもどるための準備」「新型コロナによる不安の対処」「重篤な状態にある誰かのことを子どもにいかにつづけるか」「自己隔離によるグリーフとどのように付き合っていくか」「分離不安が高まるなかでどう対処するか」など細やかに状況設定をして、セルフケアの方法や、周囲がいかにサポートするのがよいかを記している。対面のサポートは休止しているが、もともと参加していた人たちはローカルのコーディネーターによって、電話やビデオ通話で支援を受けられるようにしている。無料の電話相談、オンラインチャット相談も行っている。

さらに新型コロナに限った支援情報ではないが、**The Good Grief Trust**<sup>59)</sup> のホームページではイギリス内のグリーフサポートに関する情報を網羅的に提供しており、住んでいる場所を入力すれば、地図上に支援団体を示してくれるページもある。ここでは参考のため、この団体のトップページに掲載されている電話サポートの団体を以下に紹介する。実際的なアドバイスや支援の補助、新型コロナの影響を受けた人たちへのカウンセリングなどに関するプラットフォームを提供している団体には **National Bereavement Partnership Covid-19 HUB**<sup>60)</sup> がある。この団体では週7日、7時から22時まで電話相談を行っている。また **Sudden**<sup>61)</sup> は、突然の死別を経験した人たち向けに、電話サポートを週7日、10時から16時まで、無料で提供している。とりわけ新型コロナ

による死別を経験した人たちには、8時から20時まで対応と、サービスを拡大している。しかし一方の日本においては、週7日グリーフサポートに関する電話支援を行っている団体は現在のところ見られない。

また、イギリスのチャリティにおいて、心理的なサポートを提供している団体が多い印象を受けるが、新型コロナによって甚大な影響を受けているマイノリティへの葬送支援も存在している。NHSイングランドのデータ<sup>62)</sup>によると、BAME (黒人、アジア人、少数民族)は罹患率が不均衡に高く、彼らはイングランドの人口の10.8% (2011年国勢調査)を占めているのに対し、新型コロナに罹患した患者の16.2%を、また集中治療中の患者の35%を占めている。イギリス公衆衛生庁の2020年8月の調査データ<sup>63)</sup>では白人のイギリス人よりも、BAMEのほうが10～50%ほど死亡率が高いと発表されている。そうした状況に対し、イギリスのNPO、チャリティ団体レベルでは、BAMEを支援する団体Ubeleと協働してMajonzi基金を立ち上げ、クラウドファンディング<sup>64)</sup>を始めた事例がある。Majonziというのはスワヒリ語でグリーフ、深い悲しみを示す語である。集まった寄付を通じて、家族、職場の人たち、コミュニティ、宗教のグループなどに分配され、とりわけ国の規制の中で正式な埋葬や葬送儀礼ができなかった人たちに、亡き人を追悼し、祝福し、敬意を示すためのメモリアルイベントなどの開催を支援する予定である。4月21日に寄付集めは開始され、目標の額は10万ポンド(134円/£で換算して1320万円)で、9月末時点で約7,600ポンド(約1,000万円相当)集まっている。日本はイギリスに比べれば外国人の在住者も少ないためか、厚生労働省はこうした罹患率、死亡率などの統計で、外国人と日本人で特に区別はしていない。

## (7) 日本のNPO

それでは、日本において民間のグリーフサポートを行っているNPOの現状はどうなっているだろうか。日本は新型コロナ下において、多くの遺族会が支援を休止、制限せざるを得ない状況になっていたことが判明している。2020年5月に実施された「関西遺族会ネットワーク」によ

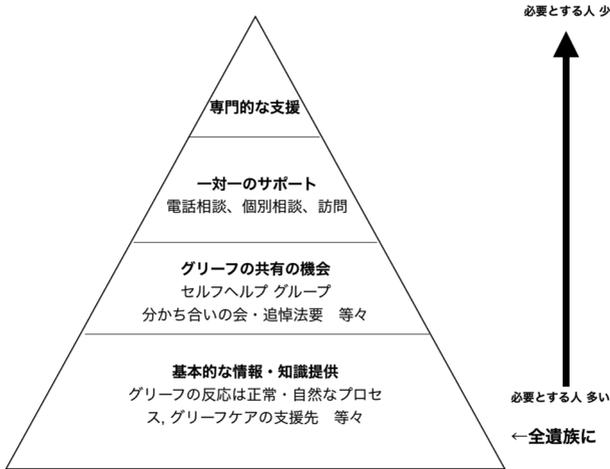


図1 必要とされるサポートの階層モデル (Tier Model)。Shaping Bereavement Care<sup>64)</sup>より。

る加盟団体 (42 団体中 29 団体回答) への調査によれば、6 割近くの遺族会が休止していた。ただ、6 月中には、ほぼ半数以上の団体が再開を予定と回答していた。オンラインを通じた遺族の交流については、3 割以上の団体 (10) がオンライン利用は検討しておらず、既に利用していた団体が 4 団体、検討をしている団体が 3 団体あった。参加対象を高齢者や子どもとしている場合、オンライン対応は難しいという意見があがっている。

日本ではイギリスのような「情報提供」を細やかに行っている団体は少ないのが現状である。おそらく、Tier モデル<sup>65)</sup> (図1参照) のような指針がないため、グリーフサポートにおいて「情報提供」が重要度、優先度が高いという認識がないことが背景にあるのではないかと考えられる。

筆者 (尾角) が運営する団体でも、オンラインの遺族会を若者を対象として開催してきたが、これまでは参加できなかった人が新規で参加するなど、新たなつながりが生まれるきっかけになっている。対面ではないリスクも検討しなければいけないが、心身が辛い状況のグリーフを抱えているとき、対面の場に行くのは困難な人もいる。オンラインでの遺

族会など、テクノロジーを活用したグリーフサポートの発展は今後、新型コロナウイルスが落ち着いてからも期待されるのではないと思われる。

#### 4. 最後に

本稿では、患者や家族がこれまでに望ましいとしてきた死の迎え方が、新型コロナウイルスの影響により実現困難になっていることを、様々な国や地域の事例から明らかにしてきた。葬送文化に関しては、新型コロナウイルスによる影響が多様な地域、宗教、伝統、慣習におけるこれまでのあり方に変容を生じさせていることがわかった。とりわけ、葬儀・法要の簡素化や縮小により、死者を弔い、共有する機会は減る傾向にあり、こうした死者を共有する機会の喪失は、遺族を孤立化させる可能性もある。しかし、一方で新型コロナウイルスの影響により、デジタルテクノロジーを活用した新たな葬送儀礼の機会や、グリーフサポートの場が急速に創出されている。この結果が一般市民や遺族にとって実際にどのような効果や意味があったのか、対面でのそうした場との相違なども含め今後検証されていくのを期待したい。

一方でグリーフサポートに関しては、新型コロナウイルスで死別を経験した遺族たちは、死を実感することが難しい状況に加えて、社会の偏見や本人が抱く不安により、公に死者について語ることができず、自らのグリーフを表現するのも困難な状況が生まれていることが推察される。こうした新型コロナウイルスの影響から生じている「あいまいな喪失」や「公認されない悲嘆」に対して、国レベル、医療機関やNPOといった民間団体レベルのグリーフサポートという観点で切り取ると、海外と比べ日本には課題が多く存在するよう見える。

しかしながら、もともと日本には、回忌法要や、お盆やお彼岸、墓参など、死者を想い、生者と死者がコミュニケーションをとり続ける文化、慣習が存在してきた。本稿でも述べたように、新型コロナウイルスの状況下で葬儀の縮小化が進んでいる一方で、日本香堂の調査<sup>67)</sup>によると、新型コロナウイルス禍においても5割以上の人が墓参をしており、さらに亡くなっ

た人への祈りや、語りかける時間が24.3%増加していたことが明らかになっている。追善供養を重ねることは、海外にない日本固有のグリーフサポートになっている可能性もある。例えば朝日新聞には、新型コロナで祖父を突然亡くしたある男性の記事が掲載されている<sup>68)</sup>。彼は、葬儀参列者数の制約に伴い、祖父とは死後の対面すらもかなわなかったが、百か日法要の頃には、故人について繰り返し語ったことによって気持ちの変容があったと以下のように話す。「こんなことが『あったね』と過去形の話が続く。実感は薄かったけど、その文脈の中で話せば話すほど、祖父の死を受け入れられた気がします」。こうした死者とのつながり方や供養のあり方が、人々が死と向き合う上で、どのような意味をもたらしているのか、また、どのような支えになっているのか、今後考察や検討を重ねていきたい。

## 参考文献

---

〈邦文〉

- ウォルター, トニー 2020『いま死の意味とは』堀江宗正訳、岩波書店。
- 坂口幸弘 2010『悲嘆学入門—死別の悲しみを学ぶ』昭和堂：118。
- 塩尻和子 2008「イスラームの死生観と葬送制度—生者と死者の共生の場」中村生雄・安田睦彦『自然葬と世界の宗教』凱風社：48-75。
- 鷹田佳典 2020「現代社会における悲嘆の個人化—「悲嘆の共同化」に向けての一試論」『現代宗教2020』：83-109。
- シュトレーベ, マーガレット・S.ほか編 2014『死別体験—研究の介入と最前線』森茂起・森年恵訳、誠信書房：31。
- 山田慎也 2007『現代日本の死と葬儀—葬祭業の展開と死生観の変容』東京大学出版会。

〈英文〉

- Birrell, J., Schut, H., Stroebe, M., Anadria, D., Newsom, C., Woodthorpe, K., Rumble, K., Corden, A., and Smith, Y. 2020 "Cremation and Grief: Are Ways of Commemorating the Dead Related to Adjustment Over Time?" in *OMEGA: Journal of Death and Dying*, 81 (3): 370-392.

- Boss, P. 2009 *The Trauma and Complicated Grief of Ambiguous Loss*. *Pastoral Psychology*, 59(2), 137-145.
- Doka, K. J. 2009 "Disenfranchised grief," *Bereavement Care*, 18(3): 37-39.
- Gibson, Margaret 2017 "Grievable lives: avatars, memorials, and family 'plots' in Second Life", In *Mortality*, 22(3): 224-239.
- SunLife 2017 "Cost of Dying Report 2017".
- Verdery, Ashton M. et al., 2020 "Tracking the reach of COVID-19 kin loss with a bereavement multiplier applied to the United States." *Proceedings of the National Academy of Sciences-PNAS*, 117(30): 17695-17701.

## 注

---

- 1) WHO, 2018.5.24. "The top 10 causes of death" (<https://www.who.int/news-room/fact-sheets/detail/the-top-10-causes-of-death>, 2020.9.28). しかしこのデータからも明らかなように、比較的貧しい経済状況におかれた国々ではいまだに感染症による死亡率は高く、こうした議論は比較的裕福な先進諸国に特徴的なものと言える。
- 2) Walter, Tony., 2020.5.4 "COVID-19: We need a new craft of dying" (<http://blogs.bath.ac.uk/iprblog/2020/05/04/covid-19-we-need-a-new-craft-of-dying/?fbclid=IwAR0U-X3w5cCss3SIJLQdMYBx2oAzvwG9azziow167ed-HjO77nvFjbLzZl8>, 2020.7.27).
- 3) 同前。
- 4) なお、新型コロナウイルスの発生と感染拡大の期間から、これ以降、本稿で言及する日付は西暦が明記されていなくても、基本的に2020年の出来事を示していることは付記しておく。
- 5) ただし、両論者が主に日本とイギリスを研究のフィールドとしていること、また利用できるのが日本語・英語資料に限られるという点においては、グローバルと言っても引用する事例は欧米諸国に偏っており、例えば新型コロナウイルスが最初に確認された国として知られる中国の事例はほとんど取り上げることができなかったことは断っておきたい。
- 6) CNN, 2020.9.20 "How it all went wrong (again) in Europe as second wave grips continent" (<https://edition.cnn.com/2020/09/19/europe/europe-second-wave-coronavirus-intl/index.html>, 2020.9.25).

- 7) The Guardian, 2020.3.19 “‘A generation has died’: Italian province struggles to bury its coronavirus dead” (<https://www.theguardian.com/world/2020/mar/19/generation-has-died-italian-province-struggles-bury-coronavirus-dead>, 2020.7.9).
- 8) 同前。
- 9) RFI, 2020.3.24 “Limited number of mourners allowed at funerals in France during coronavirus lockdown” (<https://www.rfi.fr/en/france/20200324-limited-number-of-mourners-allowed-at-funerals-in-france-during-coronavirus-lockdown>, 2020.7.9), Forbes Japan, 2020.4.17 「最期のお別れもできず… コロナ危機、葬儀現場の苦難 フランス」(<https://forbesjapan.com/articles/detail/33836>, 2020.7.9).
- 10) Reuters, 2020.3.19, “‘There are no funerals’: Death in quarantine leaves nowhere to grieve” (<https://news.trust.org/item/20200319120338-jiw6e/>, 2020.7.9).
- 11) 鎌倉新書, 2020.3.16 「【葬儀】全国の葬儀社128社と喪主経験のある2,000人に緊急調査！ 新型コロナウイルス感染拡大が、日取りを延期できない葬儀に与える影響—参列者数は減少するも、消毒液の設置など可能な限りの対応をしている」(<https://www.kamakura-net.co.jp/newsttopics/detail.html?id=7103>, 2020.7.28)。
- 12) 大正大学地域構想研究所・BSR推進センター「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」。この調査に関する報告書は同センターのHPに掲載中である (<https://chikouken.org/10879/>, 2020.12.25)。
- 13) BBC, 2020.3.24 「イギリスで外出制限命令 罰則伴う」(<https://www.bbc.com/japanese/52013783>, 2020.7.28)。
- 14) The Guardian, 2020.4.4 “UK councils begin to ban funeral ceremonies due to coronavirus” (<https://www.theguardian.com/world/2020/apr/04/uk-councils-begin-to-ban-funeral-ceremonies-due-to-coronavirus>, 2020.8.6), Sky news, 2020.4.10 “Coronavirus: York warned funeral ban is ‘a step too far’ and may breach human rights” (<https://news.sky.com/story/coronavirus-city-of-york-urged-to-reverse-ban-on-funerals-11971375>, 2020.8.6)。
- 15) The Guardian, 2020.4.14 “No-frills cremations: how coronavirus is changing funerals in Britain” (<https://www.theguardian.com/money/2020/apr/18/no-frills-cremations-coronavirus-changing-funerals-britain>, 2020.9.28)。
- 16) 実際、イギリスではすでに通常の火葬と直葬を行った遺族に対する量的データに基づいた悲嘆研究が実施されており、直葬を行った遺族は通常の火葬を行った遺族と比較し、特に後ろめたさを感じているわけではないことが、一般化は難しいとしながらも実証されている [Birrell et al. 2020]。ただし、これは新型コロナの影響が見られる前に収集されたデータに基づいている。

- 17) REUTERS, 2020.6.30「イラン、1日当たりの新型コロナ死者数が過去最多に＝保健省」(<https://jp.reuters.com/article/health-coronavirus-iran-idJPKBN24101W>, 2020.7.25).
- 18) Middle East Eye, 2020.4.6 “Mourning alone: Iran's funeral traditions crumble in coronavirus isolation” (<https://www.middleeasteye.net/news/coronavirus-traditions-crumble-iranians-grieve-isolation>, 2020.7.26).
- 19) 同前。
- 20) duvaR.english, 2020.3.27 “Istanbul buries coronavirus casualties in coffins instead of shrouds, eliminates communal funeral prayers” (<https://www.duvarenglish.com/health-2/coronavirus/2020/03/27/istanbul-buries-coronavirus-casualties-in-coffins-instead-of-shrouds-eliminates-communal-funeral-prayers/>, 2020.7.26).
- 21) 読売新聞, 2020.8.1「新型コロナで死亡の遺体、墓地や病院から強奪相次ぐ…インドネシア」(<https://www.yomiuri.co.jp/world/20200801-OYT1T50225/>, 2020.8.6)
- 22) DAWN, 3.24 “Health dept issues guidelines for burying virus victims” (<https://www.dawn.com/news/1543239/health-dept-issues-guidelines-for-burying-virus-victims>, 2020.9.28).
- 23) The Muslim Council of Britain, 2020.20.16 “COVID-19 Guidance for Muslim Communities” (<https://mcb.org.uk/resources/coronavirus/#item6>, 2020.7.25).
- 24) NPR, 2020.4.7 “Coronavirus Is Changing The Rituals Of Death For Many Religions” (<https://www.npr.org/sections/goatsandsoda/2020/04/07/828317535/coronavirus-is-changing-the-rituals-of-death-for-many-religions>, 2020.8.6).
- 25) NPR, 2020.4.7 “Coronavirus Is Changing The Rituals Of Death For Many Religions” (<https://www.npr.org/sections/goatsandsoda/2020/04/07/828317535/coronavirus-is-changing-the-rituals-of-death-for-many-religions>, 2020.8.6).
- 26) カナロコ, 2020.5.8「忍び寄る“葬儀崩壊” 感染防止は扶助外、ムスリム土葬難」(<https://www.kanaloco.jp/article/entry-348687.html>, 2020.8.6).
- 27) ABC News, 2020.4.20 “Coronavirus cremations would be 'horrific' for Muslims, but burial rituals are changing” (<https://www.abc.net.au/news/2020-04-01/coronavirus-cremations-and-muslim-jewish-death-rites/12105842>, 2020.9.18).
- 28) WHO, 2020.9.4 “Infection prevention and control for the safe management of a dead body in the context of COVID-19: interim guidance.”
- 29) 厚生労働省, 2020.7.29「新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方及びその疑いがある方の処置、搬送、葬儀、火葬等に関するガイドライン」(第1版)、26頁。なお、このガイドラインの作成協力には医療関係機関のほかに、(一社)全日本冠婚葬

祭互助協会、全日本葬祭業協同組合連合会、特定非営利活動法人日本環境斎苑協会など、葬儀業界の諸団体が関わっている。

- 30) 例えばオーストラリアのメルボルン大学では、遺体（遺骨）の処理、未来の墓地、インターネットによるデジタル・コミュニケーションなど、死を取り巻くテクノロジーの発展について研究プロジェクトを立ち上げており、その成果が活発に発信されている (<https://deathtech.research.unimelb.edu.au/>, 2020.9.29)。また日本でも情報処理学会の機関紙『情報処理』2018年7月号 (Vol. 59 No. 7) にて、「吊いと技術革新」をテーマに特集が組まれている。さらに英米を中心としたデス・スタディーズの領域でも、例えば雑誌 *Mortality* では2015年に「インターネット時代における死、死後と人間」と題した特集号が、また雑誌 *Death Studies* でも2019年の第43巻7号に「デジタルの死の未来」と題した特集号が掲載されている。
- 31) The Conversation, 2020.3.26 “Small funerals, online memorials and grieving from afar: the coronavirus is changing how we care for the dead” (<https://theconversation.com/small-funerals-online-memorials-and-grieving-from-afar-the-coronavirus-is-changing-how-we-care-for-the-dead-134647>, 2020.9.30).
- 32) IT media news, 2020.5.2 「キワモノだったオンライン葬儀に需要の兆し 新型コロナで変わる「故人との別れ」」 (<https://www.itmedia.co.jp/news/articles/2005/02/news005.html>, 2020.9.27).
- 33) Withnews, 2020.7.18 「オンライン法要、昔なら大論争…お坊さん便の衝撃、コロナ禍と仏事 Zoom版「#坊さんあるある」の未来」 (<https://news.yahoo.co.jp/articles/615bf4e2bcb9c4df352a8343ff7e30d2a2b4fd79>, 2020.9.28).
- 34) VICE, 2020.3.17 “CDC Tells Morticians to Livestream Funerals” (<https://www.vice.com/en/article/akwa5j/cdc-tells-morticians-to-livestream-coronavirus-funerals>, 2020.9.30).
- 35) Fort Worth Star-Telegram, 2020.4.5.15 “‘Drive-in funeral theater’ helps families mourn during coronavirus shutdown in Texas” (<https://www.star-telegram.com/news/coronavirus/article242041066.html>, 2020.9.29).
- 36) The Guardian, 2020.5.17 “UK funeral directors may stream burials of coronavirus victims” (<https://www.theguardian.com/world/2020/mar/17/uk-funeral-directors-consider-streaming-burials-of-coronavirus-victims>, 2020.9.30).
- 37) Somerset Live 2020.4.7 “Bath crematorium mourners face having to watch funeral online due to virus changes” (<https://www.somersetlive.co.uk/news/somerset-news/haycombe-crematorium-bath-coronavirus-video-4029356>, 2020.9.30).
- 38) Talk Death, 2020.5.12 “How to Hold a Virtual Memorial Service, a Step-by-Step

- Guide” (<https://www.talkdeath.com/how-to-hold-a-virtual-memorial-service-a-step-by-step-guide/?fbclid=IwAR3J4DC3vEGUnKSBTPIDYht7pKAFu5LRZx5sBj qxUJNYdErwmmMmMGx6y3Y>, 2020.9.28).
- 39) MIT Technology Review, 2020.4.13 “The lonely reality of Zoom funerals” (<https://www.technologyreview.com/2020/04/13/999348/covid-19-grief-zoom-funerals/>, 2020.9.30).
- 40) Huffpost, 2020.4.8 「新型コロナで、葬儀もライブ配信「離れていてもお別れしたい」」 ([https://www.huffingtonpost.jp/entry/story\\_jp\\_5e8d169fc5b62459a9309663](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_5e8d169fc5b62459a9309663), 2020.9.28).
- 41) Prospect, 2020.4.20 “Lockdown-era Zoom funerals are upending religious traditions—and they may change the way we grieve forever” (<https://www.prospectmagazine.co.uk/philosophy/funerals-during-lockdown-coronavirus-covid-religious-tradition-zoom-grief>, 2020.9.30).
- 42) The Cut, 2020.4.24 “Our Way of Holding You: A Brooklyn rabbi on what it’s like to officiate a funeral over Zoom.” (<https://www.thecut.com/2020/04/what-its-like-to-officiate-a-funeral-service-over-zoom.html>, 2020.9.30).
- 43) 同前。
- 44) Global news, 2020.4.17 “‘Final Fantasy’ gamers hold online funeral for player who died of COVID-19” ([https://globalnews.ca/news/6832247/coronavirus-video-game-funeral/?fbclid=IwAR0SjN5852JsdZcSjeQ9U9r5W4 L25Y\\_ID8u0EFWrHj8NvjxTtB5iUo9DsA](https://globalnews.ca/news/6832247/coronavirus-video-game-funeral/?fbclid=IwAR0SjN5852JsdZcSjeQ9U9r5W4 L25Y_ID8u0EFWrHj8NvjxTtB5iUo9DsA), 2020.9.28).
- 45) The order of the good death, 2020.5.13 “EXPLORING GRIEF IN ANIMAL CROSSING: NEW HORIZONS” (<http://www.orderofthegooddeath.com/exploring-grief-in-animal-crossing-new-horizons?fbclid=IwAR11s66mZ2ymyBTNQgK9bIip h9NkQzMK-VvuCxi2uLcqA0oD0G5JYWzNi5I>, 2020.9.28).
- 46) Automation, 2020.6.4 「『あつまれ どうぶつの森』で「葬儀文化」が独自の形で発展していく。墓石を前にして彼らは何を弔う」 (<https://automaton-media.com/articles/newsjp/20200604-126294/?fbclid=IwAR0wT106f0G-XnKFOIyZ1 HzmWJGOTGO yNmlUUtZVEXfiUUIGuL0Gj-rw7Y0>, 2020.9.28).
- 47) World, 2020.4.14 “Why funeral directors are hoping to bring back an old tradition during the coronavirus pandemic” (<https://www.runcornandwidnesworld.co.uk/news/18377718.funeral-directors-hoping-bring-back-old-tradition-coronavirus-pandemic/>, 2020.9.18).
- 48) 自殺総合対策推進センター, 2018 「自死遺族等を支えるために～総合的支援の手

- 引] (<https://docs.google.com/viewer?url=https%3A%2F%2Fwww.mhlw.go.jp%2Fcontent%2F000510925.pdf>, 2020.9.20).
- 49) BBC, 2020.5.31 “Coronavirus: Helping the bereaved with ‘emotional PPE” ([https://www.bbc.com/news/uk-wales-52833504?fbclid=IwAR0xVyI3DL\\_UEyMpr0d6QzG0PU12bJjEavpvQcWiFfv-IIWSlgkqYSZwyIo](https://www.bbc.com/news/uk-wales-52833504?fbclid=IwAR0xVyI3DL_UEyMpr0d6QzG0PU12bJjEavpvQcWiFfv-IIWSlgkqYSZwyIo), 2020.9.20).
- 50) 神戸新聞, 2020.4.4「『透明の納体袋』神戸市が準備 突然の感染死『故人を見たい』」 (<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202004/0013246205.shtml>, 2020.9.20).
- 51) CNN, 2020.4.25 “Writing about the dead during a pandemic: ‘They are not a statistic or data point” (<https://edition.cnn.com/2020/04/25/media/newspaper-obits-coronavirus/index.html>, 2020.9.1)
- 52) PBS, 2020.10.2 NEWS HOUR “In Memoriam” (<https://www.pbs.org/newshour/tag/in-memoriam>, 2020.9.20).
- 53) NHK, 2020.5.9「新型コロナウイルス感染者・家族 遺族の証言母の死親戚にさえずり」 ([https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/testimony/detail/detail\\_14.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/testimony/detail/detail_14.html), 2020.9.20).
- 54) スコットランド語、ウェールズ語、アラビア語、ベンガル語、中国語、フランス語、ドイツ語、グジャラティ語、イタリア語、リトアニア語、ポーランド語、ポルトガル語、パンジャビ語、ルーマニア語、ソマリ語、スペイン語、タガログ語、タミル語、ウルドゥー語、トルコ語など。
- 55) Mayor of London, 2020 “How to cope with bereavement and grief during the coronavirus outbreak” (<https://www.london.gov.uk/coronavirus/how-cope-bereavement-and-grief-during-coronavirus-outbreak>, 2020.9.21).
- 56) The Strategic Coordinate Group, 2020.4.19 “Funeral Standards” ([https://docs.google.com/viewer?url=https%3A%2F%2Fwww.westminster.gov.uk%2Fsites%2Fdefault%2Ffiles%2Fcovid-19\\_funeral\\_standards\\_in\\_london\\_pdf\\_19.4.20.pdf](https://docs.google.com/viewer?url=https%3A%2F%2Fwww.westminster.gov.uk%2Fsites%2Fdefault%2Ffiles%2Fcovid-19_funeral_standards_in_london_pdf_19.4.20.pdf), 2020.9.22).
- 57) Cruse Bereavement Care, “Coronavirus, bereavement and grief” (<https://www.cruse.org.uk/get-help/coronavirus-bereavement-and-grief>, 2020.9.20).
- 58) Winston’s Wish, “Supporting children through coronavirus” (<https://www.winstonswish.org/coronavirus/>, 2020.9.20).
- 59) The Good Grief Trust, “Find Support” (<https://www.thegoodgrieftrust.org/find-support/>, 2020.9.21).
- 60) National Bereavement Partnership, (<https://www.nationalbereavementpartnership.org/>, 2020.9.20).

- 61) Sudden, (<https://sudden.org/>, 2020.9.20).
- 62) The Guardian, 2020.4.16 “Inquiry announced into disproportionate impact of coronavirus on BAME communities” (<https://www.theguardian.com/world/2020/apr/16/inquiry-disproportionate-impact-coronavirus-bame>, 2020.9.29).
- 63) Public Health England, 2020.8 “Disparities in the risk and outcomes of COVID-19” ([https://docs.google.com/viewer?url=https%3A%2F%2Fassets.publishing.service.gov.uk%2Fgovernment%2Fuploads%2Fsystem%2Fuploads%2Fattachment\\_data%2Ffile%2F908434%2FDisparities\\_in\\_the\\_risk\\_and\\_outcomes\\_of\\_COVID\\_August\\_2020\\_update.pdf](https://docs.google.com/viewer?url=https%3A%2F%2Fassets.publishing.service.gov.uk%2Fgovernment%2Fuploads%2Fsystem%2Fuploads%2Fattachment_data%2Ffile%2F908434%2FDisparities_in_the_risk_and_outcomes_of_COVID_August_2020_update.pdf), 2020.9.26).
- 64) Go Fund Me, 2020.4.21 “Majonzi fund: Covid-19 bereavement fund” (<https://www.gofundme.com/f/majonzi-fund-covid19-bereavement-fund>, 2020.9.26).
- 65) National Bereavement Alliance, 2017 “A guide to commissioning bereavement services in England” (<https://docs.google.com/viewer?url=http%3A%2F%2Fnationalbereavementalliance.org.uk%2Fwp-content%2Fuploads%2F2017%2F07%2FA-Guide-to-Commissioning-Bereavement-Services-in-England-WEB.pdf>, 2020.9.10).
- 66) Scottish Government, 2011 ([https://docs.google.com/viewer?url=http%3A%2F%2Fwww.sehd.scot.nhs.uk%2Fmels%2FEL2011\\_09.pdf](https://docs.google.com/viewer?url=http%3A%2F%2Fwww.sehd.scot.nhs.uk%2Fmels%2FEL2011_09.pdf), 2020.9.27).
- 67) 日本香堂, 2020.7.15 「『コロナ自粛による生活者意識の変化』に関する調査」期間6月23日～24日、全国1,036名の成人男女を対象。( <https://www.nipponkodo.co.jp/blog/information/3503/>, 2020.9.28).
- 68) 朝日新聞, 2020.8.16 「甲いかなわぬ『お別れ』、孤独な遺族」(<https://www.asahi.com/articles/DA3S14588681.html2>, 2020.09.29).